

---

# リベンジ！

重装改

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リベンジ！

### 【Zコード】

Z7094Z

### 【作者名】

重装改

### 【あらすじ】

四年前、十九年間育ててくれた恩師を目の前で殺された青年と、その死の原因となってしまった 魔機 の操者。

四年ぶりに思わず形で再会した彼らは……

天地物語の息抜きで書いているので、非常に不定期です。  
ご了承下さい。

あと、たまに技名叫ぶかもしれないんで、苦手な人はご注意下さい。

バルグ国の不落壁 と言えば、

『早朝に周りを走り始めたら一周する頃には次の日の出を迎える』

『生えようとした雑草が見張り番に睨まれただけでみるみる萎れた』

『見張り番がグッと握りこぶしを作つただけで、賊の自走砲が吹き飛んだ』

『心なしか、見張り番の方が国王よりも偉そうだ』  
など、酒場の笑い話やお国自慢には欠かせない。

今、その壁の外に広がる広大な景色が戦火によつて薙ぎ払われ、  
そして焼き尽くされていた。

戦場に立つている者は大きく分けて二種類だ。

一つは、大きい物は三機積めば城壁の壁に届く程の甲冑然とした  
巨大な機体。

魔力を込めた魔石を媒介に動く、通称…… 魔機。

そしてもう一つは、連なる黄色の单眼、黒光りする表皮、ヨダレ  
が滴る牙、一目見て外敵とわかる、非常に醜悪な怪物。

空の裂け目から降りてくるその様子から、 異界獣 と呼ばれて  
いる。

これら以外は乱戦の煽りを受けて全て跡形も無い。

何故、異界獣は人々を襲うのか。

何故、異界獣は空の裂け目から表れるのか。

何故、何故、何故……！

わかる事は一つ、連中の侵入を許したが最期。

国は、滅ぶ。

「こちら、不落壁監視隊のギャラク！ ダメだ、突破される、うつ、  
く、来るな、来るなああああ！」

白地の身体、紺色の右腕という不落壁北部監視隊の正式カラーリ

ングの魔機、ブロン・ブロン。

民衆の安全と平和の象徴が、異界獣の触手と爪にズタズタにされて崩れ落ちる。

戦線は広く濃密に敷かれていたが、しかしここに一瞬出来たほんの一つの小さな穴。

異界獣の最大の特徴は、自身の一瞬の変形である。

先程まで一足の獣を象っていたそれらは、一瞬で翼を生やし小さな隙間に突撃をかける。

もちろん、残存した監視隊と駆け付けた国境偵察隊の戦力で懸命に止めにかかるが、カバー仕切れなくなつた隙を突き崩すように三体の異界獣が風を切つて高く飛び上がり、不落壁を越えてしまつた。「まずい、抜けられた！」

「気を散らすな！ 後続が来るぞ！」

「今はこれ以上の侵入を、阻む！」

不落壁と城下街の間には、日の出から歩いてお昼時になる距離の隙間があり、農地や放牧地はここにある。

しかし、そこには、普段は存在し得ない者があつた。

純白に輝く剣を握つた、白銀の魔機である。

その名は、シルヴァリス。

魔機は異界獣との、つまり地表から不落壁までの距離を一瞬で詰め、一番近くにいた一体を反撃の隙も与えず切り刻む。

「隊長、増援です！ あ、あれは…… 銀色？ セル・バンではありますんが、銀色です！」

「なにつ本当か、ロツソ！ 本当に 銀色 だと！？」

「国王親衛隊！ それほどの敵、か……」

基本的に装飾や彩色は騎士の自由とされる魔機だが、絶対に使つてはならない 忌み色 というものがある。

その内、漆黒は異界獣の色であり、誤射を防ぐ為につい最近決められた色だが、金と銀は遙か昔からある一つの集団を除いて、使用、即死刑という重大な罰則が設けられている。

国王親衛隊……その忌み色を使う事を許された、トップエリート。ちなみに、シルヴァ里斯は正式採用されたセル・バンの次世代機にあたる。

鋭角的な頭部の頂点に煌めく、鷹を模した金の装飾……この装飾は一人一人違い、どれも国王直々に認められた証拠である。

シルヴァ里斯は全速力で市街地へ飛び、異界獣を追い詰めて空を翔ける。「親衛隊とは確執も深いが、それどころではないな。……

頑張れよ、銀色！」

「娘を頼む！」

不落壁周囲の防衛隊に発破をかけられ、異界獣を追つて市街地へ突入する。

「さて、助けに出たのに励まされるとは、初陣がばれたかな？ シルヴァ里斯」

シルヴァ里斯は何も反応せず、操者の動かし方通りにただ愚直に異界獣を追い詰めつつ市民の避難路から徐々に遠ざける。

しごれを切らしたのか、異界獣の一体が体の一部を銃に変形させた。

「さっきの剣が恐くっての銃撃戦のつもりなら、この距離で負けはしない！」

操者の叫びに同調して赤い目を光らせるシルヴァ里斯。

「光れよ、剣！」

異界獣が無数の弾丸を放つと同時にシルヴァ里斯が剣を一振りした刹那、それら全ては虚空に焼き消え、異界獣が剣の軌跡を描いて真つ二つになり、ドロドロと溶けだした。

異界獣が自身を象る為に必要な『核』を焼き切ったのだ。

一体目は、仮に核が残つていようがあれだけ細切れにされた以上、生命維持が不可能になつて即死したである。

逆に言えば、核が有るならば余程丹念にバラさない限りは異界獣は死はないし、異界獣毎にコアの位置はまるで違う。

一体を片付けて一息ついた操者だが、己が重大なミスを犯した事

に気がついた。

残つた一体に距離をとられてしまつたのだ。  
逃げられたと言つてもいい。

「もう一体……シルヴァ里斯、よく見ろ！」

操者は魔力を赤い目に注ぎ、落日の方向に黒い影を見出だした。  
「よくもまあ……奴は逃げを決め込んだ、翔けるつシルヴァ里斯！」  
異界獣は、速く、そして見つかりにくくなるために体を円盤状に  
変形させて飛んでいた。

しかし、それでもシルヴァ里斯は更に速かつた。

距離を詰めて下に回り込み、切り刻まんと剣を構える。

「沈め、異界獣！……う、うわあっ！？」

異界獣はまるで読んでいたと言わんばかりに下部に銃口を密集させていた。

「こちらじゃない。奴の狙いは市街地！」

操者は、剣と利き腕に集めた魔力全てを全身の外に流し込む。  
「つうううううつ！」

銃口からばらまかれた弾丸をシルヴァ里斯から展開した力場で防  
ごうとするが、全身に回りきらない。

「左足損傷拡大、だと！？ 魔力を使いすぎた？ そ、そんな馬鹿  
な……」

訓練とは違う連戦というものに操者は恐怖を覚えた。

「いいや、まだ、まだまだっ！」

気合いを入れるも、敵の銃撃は止まず操者の魔力は減る一方。  
外は未だ激戦故に増援の見込みは無く、頭部の鷹も片羽が欠ける。  
市民のシルヴァ里斯を見つめる目も徐々に当初の希望に溢れたも  
のから、不安と絶望の混じつたそれになる。

「ドミしさいさま、ケビン、ぎんいろさんがあぶないよ！」

「ドミしさいもケビンもおうえんしようよ！」

子供一人にドミとケビンと呼ばれた眼鏡をかけた禿頭の老人と金  
髪の青年は、それぞれを礼拝堂の地下に引きずり込む。

「わかつたから、マリーもバルザックもとつと地下に入れ！　あと、ケビン司祭見習いだ、呼び捨てるな！」

「いらっしゃ、子供相手にムキになるな。地下で点呼をとつてきてくれ、万が一がある

「わかりました、司祭様！」

「この礼拝堂の地下は普段は身寄りの無い子供達の仮のねぐらであり、ケビンもそういう浮浪児の出である。

しかし今は逃げ込んだ市民でいっぱいであり、もし子供が一人二人いなくても気づかない場合もありえる。

数分後、息を切らせたケビンが顔を青ざめさせて絶望的な一言を発した。

「ハア、ハア、ハア……し、司祭様！　カーチスが、どこにも、いません！」

子供の一人がいない……避難の際に逃げ遅れたのだ！

「ハア、ハア……司祭、様！　俺が、行きます！」

「ダメだ！　ウチの礼拝堂は無駄に階段があるからな、疲れたろう。私が行く！」

「あつ、司祭様！」

司祭はケビンが止める前に駆け出して、あつといつ間に市街を縫つて見えなくなってしまった。

「司祭様……」

一方、市街上空でも決着がつこうとしていた。

シルヴァリスに埋められた魔石の魔力と操者の魔力、両方が尽きようとしていたのだ。

「どうすればいい……どうすれば……くそあつ、シルヴァリス！」

そして市街。

「しゃいさまああああ……」

「よしよし、足をくじいたのか。任せなさい」

ドミ司祭はガレキの中からカーチスを引きずり出し、脇に抱えて走り出した。

(あの銀色は攻めあぐねている。……いや、勝てるぞ!)

「おーいつ聞けえええ！」

「何だ……？ 老人と子供、逃げ遅れたか！？」

シルヴィアリスの操者が半ば諦めて意識を散らしていたのが幸いした。

「聞けつ！ 市民はあらかた避難した。力場を解いて左手と右手の剣に魔力をありつけ注ぎ込め！」

「力場を解けだと！？ 死ねと言うか、ご老体！」

それを聞いて司祭は操者が非常に焦っているのを感じ取った。

「いいから、さつせと！ 遅かれ早かれ死ぬなら……敵の首でも、討ち取つて見せろ！」

「……！ おっしゃる通りだ、左手と剣だな！ それで次は！？」

決意がついたか、先程よりは焦りが抜けた声で操者が次の指示を求める。

「左手で相手を思いつきり、ぶん殴れ！」

「なっ！？ いや、承知した！」

シルヴィアリスを覆っていた力場が解けた次の瞬間、異界獣の肉体で形成された弾丸の豪雨に晒され、装甲がちぎれ飛ぶ。

「ぐうっ、こいつ、沈め、よおおおつ！」

シルヴィアリスが、魔力を溜めた拳を叩き込む！

しかし、異界獣は銃口になつていた部分の大半を移動させて何ともないよう防いでみせた。

「だ、だめだ……」

「諦めるな、むしろ好機だ！ 対角線上に剣を！」

「！」

司祭の言葉の意味を悟った操者はシルヴィアリスの右手に握った剣を、左手に気をとられて守りも攻めも手薄になつた異界獣に突き込み、そのまま左へ左へと……

「切り刻む！」

異界獣も残つた銃口で反撃を試みる、が……

「遅おいつ！」

射出するより先に自身を真つ二つにされ、沈黙した。

「や、やつた。やりました、『老体！』」

操者が勝鬨の声を上げるが、そこには既にドリ同祭もカーチスもいなかつた。

「ハハッ、挨拶ぐらいさせてくれてもいいだろ？」「……」

「司祭、それにカーチスも！」「無事で！？」

「ああ、ケビン。あの魔機のおかげでね」遠方に控えるシルヴァ里斯を指す司祭。

「見たことがない奴ですね」

「そうだね。……大きくなつたものだ」

「今、なんと？」

最後の台詞を聞き取れなかつたのか、ケビンが聞き返す。  
「いやいや、なんでもない。おお、カーチスを忘れていたよ、しばらく立てそんにはないがな」

「ケビン、こわかつたよおおお！」

「呼び捨てすんな！」

「ハハハ……」

全ての脅威が去つた。

人々は礼拝堂の地下からおつかなびつくり出てきてその事実を再確認すると、シルヴァ里斯に向けて歓声を送つた。

「よくやつた！」

「さすが親衛隊！」

「国王バンザイ！」

異界獣は地に倒れ伏し、白銀の魔機、シルヴァ里斯はボロボロながらもそこに立つていた。

誰がこれを敗北と言おうか。

そう、異界獣は、『倒れ伏していた』。

異界獣の周りでナメクジか何かがはいざる様な音がしたのを、司

祭は聞き逃さなかつた。

「跳べ、銀色！」

「な、なにつ！？」

異界獣の触手がシルヴァリスの少し下を掠める。

司祭が気づくのがあと一瞬遅かつたらシルヴァリスは粉々だつただろう。

「怪物が、生きてる？」

「に、逃げる」

「逃げろおおおおおお！」

市民が、地下になだれ込む。

その軌道には、まだカーチスを抱えたままのドミニ司祭がいたが、彼らは完全に理性を失っていた。

「どけつ、ジジイ！」

命の為なら今は走りを止めるどころではないのだ。

例え、自らに安全な場所を提供してくれた恩人が目の前にいようが。

「くつ。ケビン、カーチスを受け取れ！ 後は頼……」

「うつ！ し、司祭様！」

カーチスを受け取ったケビンは、自分を赤子の頃から十九年間育てて下さったドミニ司祭が人々の波に薙ぎ倒されてボロ雑巾のような姿になる様を見届けた。

「き、貴様ら、よくも！」

見届けてしまった。

「！」のひ、「このおおおおつ！ 光れ……剣！」

白銀の魔機が残つた全ての魔力を振り絞り、異界獣をバラバラにする。

しかし、全ては手遅れだ。

「ご老体、そんな、嘘だ……」

操者もまた、司祭の壮絶な最期、関わつた時間が少なくとも傑物

だとわかる偉人の余りにも不条理な最期を見届けてしまった。

そして、その死に様の原因は、間違いなく自身の油断だ。

「金の、鷹……」

「えつ？」

操者は音声を拾い、またそれが司祭の死の寸前に一、二言会話をしていた青年であることに気づいた。

「仮面と変声機でお前がわからなくとも……」

操者は内心祈った。

「お前が、トドメを刺していれば！」

やめてくれ、それ以上何も言わないでくれ……と。

「覚えたぞ、その鷹の飾り！ 覚えたぞおおっ！ 絶対に、絶対に殺してやるッ、殺してやるからなあああ！」

現実はケビンにとつても操者にとつても残酷だった。  
極めて、残酷だった。

## 復讐の始まり（一）

月日が経つのは早いもので、不落壁を巡る攻防、シルヴァアリストその操者の初陣、そしてドミニ司祭の死から四年が過ぎた。大陸中を震撼させ、大陸全ての国家が同盟を結ぶきっかけになつた異界獣達もいつの間にかいなくなり、あの頃孤兎だった連中は無事に働き口を見つけて独り立ちした。

「では、皆さん。世界と我らを創り今日も我らを見守る六神に祈りましょ!」

二十三歳になつたケビンは、ドミニの後釜として司祭に任命された。

「じゃあな、ケビン！」

「このクソガキ！ ケビン『司祭』だ！」

「さよなら、司祭様」

「さよなら奥さん、旦那さんにようしく！ 脚を治したら、一緒に飲みに行きましょうつて！」

根っここのところは相変わらずだが。

「ケビンさん、ご飯でゴザルよー」

「お、ちょうどそんな時間だな！ ありがとう、ムラマサ」

焼いたパンとシチューを両手に礼拝堂のドアを蹴破つてケビンを呼んだ、出るところは出て締まるところは締まつた、エプロン姿の女の子。

ムラマサ、本名不明の元浮浪者で、現在唯一の礼拝堂地下の住人である。

本人曰く、海の向こうからすりこむすりつてバルグ国に流れ着いたとか。

二人は表から礼拝堂に続く階段に腰掛け、食事に手をつけた。

「いやー、拙者がここにかくまわれてから一年。時間は凄まじいでゴザルなあ

「あの時は髪の毛ボサボサでめちゃくちゃで、コチャコチャ着込んで風呂に入れるまで女の子ともわからんかったなあ」

ケビンは、死人同然の彼女の首根っこを掴んで風呂場まで引きずり込んで服とフードのついたマントを脱がした時の、わりと大きい胸と、羞恥で赤く染まつた可愛らしい顔つきをしみじみと思い出した。

「お風呂は、偉大でゴザル……。見て下さい、この艶！」

「髪にシチューツコでも知らござ。あと、そのわざといつて、『アザムリマサはわづこって血分の黒い髪を血漬けに見せつけた。

ル口調も、だいぶ板についてきたな」

よー!? 「これは元から、元からで“ゴジヤル!”

「嘆んだぞ、想いもあり。まあ、別にいいよ、ムツマサヒコムツマ

「ケビンさんにはいつも世話になつていで申し訳なく思うばかりで、うつ、うつ……ケホケホ！」

「だあつ、飯食いながら感極まるな！ 案の定咳込むし、汚いし…」

「あれから四年経つたか」

「一年でゴザル」

卷之三

空をぼやつと見上げるトビンを見て、マリマサは自分の考えを口にした。

「自分より丑い年下の女の子と一緒に屋根の下で爛れた生活を送っているのでゴザル

「八割以上はお前のせいだよ！ ここ以外の働き口を見つけるよー」  
間髪入れず、ツツ「ミを入れるケビン。

付き合い長いだけあり阿吽の呼吸である。

「だが、確かにこんな姿は見せられないなあ。アイツも見つからな

いし

「アイツ……ケビンさんが言つていた、仮面ヤローでゴザルね？」  
「その通り。聞けばあの日の後に親衛隊を辞めちまつたらしいじゃ  
ないか」

「確か、不落壁のどこかに就いたらしくゴザル」

「会いに行つてぶん殴りたいのは山々だが、ここからじやあ一日半  
はかかるし、あまりここを離れるわけにもいかないからなあ……」

「仕事なら、拙者も手伝えるでゴザルよ？」

「人見知り万々歳、だな。けつ」

「いやあ、照れるでゴザル……」

「褒めとらん！」

意外なことにムラマサは極度の人見知りで、ケビンに拾われた後  
も礼拝堂地下からろくに出たがらなかつた。

その分ケビンの仕事ぶりはよく見ており、持ち前の飲み込みの速  
さも手伝つて今では四年前のケビン以上には働くことができる。

「気持ちはあるがたいけれど違つんだよ。ほら、お前が来た頃から  
何やら変な連中が 天へと続く道 とか言つ宗教を追つ立てたじや  
あないか」

「順序が逆でゴザル。拙者が来た頃には既に連中は追つ立てていた  
でゴザル」

「あれつ、そうだつけ。まあ、いろいろ過激な連中だし礼拝堂やム  
ラマサを置いてきぼりには出来ないよ」

天へと続く道。

異界獣がいなくなつた近年に広まりだしたそれは、教祖にして唯一神のジンという男が人の心に安らぎをもたらしてみせるという物  
で、教祖に手をかざされた男の動かなくなつた半身が治つた、だの  
逸話には事欠かない。

「まあ、祈願祭みたいな行事はまだ先だし。暇を見て見張りでも雇  
つてみるかね」

「そうと決まればお仕事でゴザル。頑張りましょう、ケビンさん」

「頼りにしてるぜ」

彼らはお互に食事をすませ、傍からみたら非常に仲睦まじそうに礼拝堂に入つていった。

不落壁。

かつて異界獣を幾度と無く食い止めてきた壁は、今も国防の要所として機能している。

その屋上で、三機の魔機 ブロン・ブロン が遙か遠方に田を見張らせていた。

その中から人影が一つ、腰部ハツチをあけて屋上に飛び出した。「十一時、不審な物は見受けられず。見張りを交代し待機に入る」と

壁に掛けられた紙に勤務の報告を書き綴つた人影、魔機の操者は居るはずの交代を待つた。

「すまない、ウェイン。交代か？」

少しした後、若い騎士に声をかけられ、ウェインと呼ばれた操者は返事をする。

「ええ、コバックス。ちょうど貴方に用があつたの」

ウェインは空色の瞳を不満げに細めた。

「わかった、すぐに行くよ」

「お願ひね」

ウェインは会話を済ませて踵を返したが、突然彼女から『クウーッ』と可愛らしい音が響いた。

いきなりなつた音にウェインはハツとし、それが自らの腹から出でていた事に気づくと、顔を真っ赤にする。

「ハハハ、尚更急がなきや。レディのお腹まで文句を言つてきたとは、よっぽどだ」

「もうつ、茶化さないでよ！」

恥ずかしそうに階段を駆け降りたウェインを見送つたあと、コバックスも魔機に乗り込み、機体のコンティジョンを示すパネルに目

を通す。

「魔力炉に異常無し、推進部、オートバランサ、装甲強度、排熱孔、視覚センサ、いずれも異常無し。……おや？」

彼は視覚の角にあつた異物に気づき、そしてそれが何かも理解した。

「ウェインがこれを忘れるなんて珍しい。後で渡してやるか」

「休暇……ですか？」

「ああ、休暇だ」

当のウェインは食事を済ませた後、不落壁の西部ブロック隊長マクギニスに呼び出しを受け、そして今に至る。

「私は特に問題ありませんが」

「いいや、あるね。一年中働き詰めでは肩に力が入り過ぎて下らなりミスをするものや。」

「はあ……」

「それに、部下に休暇を与えていないと風当たりが厳しくてね。私の頭もこれ以上寂しくしたくない」

マクギニスは自分の禿頭をさすって、苦笑いをした。

「……ではいくら程が良いでしょうか？」

「そうだね、市街まで片道一日少し。なら一週間でどうだろうか？」「わかりました」

「ブロン・ブロンを使うかい？ 片道十分少しまで縮むが」

「ご冗談を！ ……では、準備してまいります。」

隊長室の出口に向かつたウェインは扉を開けると、はにかみながら振り返った。

「隊長！ 私の居ない間に西ブロックを陥落させないで下さいや？」

「ハハハハハ……ぬかしたな！」

「ええ。ふふふ……」

隊長室に笑いが響く。

「それでは、失礼します！」

「ああ、こつてらつしゃい」

扉が閉まる。

マクギニースはウェインの足音が遠ざかるのを聞き届けると、視点を机に向けて、深くため息をついた。

「オズワルド、リンは冗談を言えるまで立ち直つたぜ。お前は何をしているんだ……」

マクギニースが見つめる先には写真があった。  
まだ生え際がしつかりしているマクギニースと、幼いウェイン、そしてもう一人、長髪と髭が目を引く男性、そして眼鏡をかけた禿頭の男性。

表情こそ硬いものの、四人ともそれを信頼している事が感じ取れる写真であつた。

礼拝堂。

すっかり疲れきった表情のケビンは、部屋に入つてベッドを見るなり目の色を変えて飛び込んで、身体を大きく伸ばした。

「くはーつ、疲れた……」

『むにつ』

「キャツ！』

手の平に感じた柔らかな異物感と間の抜けた声に気がついたケビンは、ベッドから異物感の正体……ママサを引きずり、部屋からほうり出した。

「あつ、どうしてそんな酷い仕打ちをするでゴザルか！？』

「いいからとつとと出てけ！ お前には地下があるだろ！』

「嫌でゴザル！ 一階の方が陽射しが暖かいのでゴザル！』

極めて真剣な面持ちで言い切るママサに、ケビンは馬鹿馬鹿しくなつた。

「わかつたわかつた。そん代わり、二人だから狭いぞ？』

「構ないのでゴザル。それに、一人の方がもつとあつたかくて素

敵で「ゴザル。……ケビンさん、顔が赤いで「ゴザルよ。」

ケビンは指摘の通り、顔を真っ赤にしながらムラマサの首根っこを掴んでベッドに引きずり込む。

「なあんでお前は、そんな恥ずかしい」と平氣で言えるかなー。」

「人前では無理で「ゴザル、ケビンさんの前だからこそ」と平氣で言えるかなー。」

「なあ悪いわー！」

こんな感じでじばらぐギャー、ギャーと問答していた二人だが陽射しの魔力には勝てず、結局一人仲良くすやすやと眠りについた。

夕方。

「では、行つてまいります。」

ひとしきり準備を済ませ、操者用のピッヂリとしたスーツから簡素な服に着替えたウェインが不落壁の門に一礼する。

門の上には、同僚達が男女問わず大挙して見送りに来ていた。

「元気でな！」

「貴重な女の子成分があ……」

「なんか土産頼むぜー！」

「俺はエロいのー！」

「俺もエロいのー！」

「僕もー！」

「わちきもー！」

「磨もー！」

「おいどんもー！」

「バカヤローー！ 女の子だぞ！ ウェインさん、いつへらうしゃい

！」

「空氣読めー！」

「何だとおーー？」

ウェインは、苦笑しながらも自分を見送ってくれる仲間の多さに、ただただ感激した。

「ウヰーーンッ！」

集団の奥から、聞き慣れた声が響く。

「ゴバックス！？」

勤務終了から間もないゴバックスが、息を切らせながら集団を搔き分ける。

「忘れ物だ、ウェイン！」

ウェインは遙か高くから放り投げられた物を、慌てて受け止めた。

「これは……」

「ブロン・ブロンの中に落ちてたぜ！ 大事な物だろ！」

「……ありがとう、本当にありがとう…」

「いつてらっしゃい、ウヰーイン！」

「いつてきます！」

ウェインが嬉しそうに手にしたそれは、白と黒のツートンカラーの仮面。

四年前、シルヴァリスの操者が付けていた仮面と全く同じ物だった。

## 復讐の始まり（2）

リン・ウエインが市街に向けて歩みを進めていた頃、ケビンとムラマサは夕方になるにも関わらずまだ眠っていた。

「むにゃむにゃ……」

「すう、すう、んつ、んんん……」

寝返りをうつてムラマサから離れたケビンをムラマサも寝返りをうつて抱き留める。

こんなふうにお互いを抱きしめあって寝ていながら、夫婦みたいだと指摘されると互いに顔を赤めて否定するからおかしなものである。

しかし彼らの安眠を妨げる物があった。

彼らの上空を突如引き裂いて現れたそれは、魔機を爆破しても鳴らないようなものすごい轟音をあげて礼拝堂そばの広場に突撃した。

「……なっ、何だあ！」

「な、何事！？」

当然、ほぼ爆心地の彼らはこの日茶苦茶な出来事に寝ぼける暇もなく目を覚ました。

「ケビンさん、広場が！」

「ああ、見に行ぐぞ！」

二人は着の身着のままで外へ走る。

そして、その光景に驚愕した。

「これは……隕石じやねえか！」

隕石、それも標準的な魔機の半身はありそつた大きさの物が巨大なクレータを作っていた。

「ケビンさん、この場所つてまさか……」

ムラマサの指摘に、ケビンはハツと気がついた。

広場に建てた司祭様の墓がどこにもない。

正確には、隕石から少しづれた場所が衝撃の煽りを受け、墓が『

墓だつた場所』になつてしまつていた。

「ああつ、司祭様の墓が、墓が粉々になつちまつた…」  
突然の不条理に呆然と立ち尽くすケビン。

「なんだなんだ？」

「何これ？」

「知らないよ！」

野次馬達も次々と集まつてきた。

「ひつ！ ケ、ケビンさん、人が、人がいつぱいでゴザル！」

ケビンを影に隠れるムラマサ。

しかし、当のケビンはポカンとした顔で隕石を見上げていた。  
だが、突然それをキッと睨みつけると、司祭の墓の破片らしき物  
を握り、隕石にたたき付ける。

「ケビンさん！？」

「隕石め！ 何が何だかわからんが、よくも司祭様の墓を！ 貴様  
なんぞ、墓石にしてやる！」

ケビンは隕石に破片を押し当て、尖った部分でガリガリと削つた。  
隕石も隕石で、落着の衝撃を耐えた割には簡単に削れしていく。

「『バルグ歴七十七から百十一』、ドミ・カームにここに眠る』……ど  
うだ、ざまあみろ！」

「ケビンさん……」

「あん？ ムラマサ、ちつとは空氣読め！」

「腰が抜けたのでゴザル……」

がぐがくと脚を震わせるムラマサ。

「……けつ、まったく。ほら、肩かしてやる」

「かたじけないでゴザル、まだ色々やることがありましたよね……

？」

「いいよ。こんなクソ隕石よりムラマサの方が大事だ」「

「ケビンさん……」

「「「「観衆の真つ只中でノロケやがつて……」「」「

「そ、そんなんじやありません！」「

周りの田が厳しくなってきたので、ケビンはムハマサをじょい込みながらそそくさと礼拝堂に引き上げた。

「まったく、非常識な若者だ」

「幸せな奴らだ」

「私達にもあんな頃がありましたね、ばあさん」

「ええ、じいさん」

「俺も記念に文字を彫つてみよつ」

「僕も」

「わても」

「我輩も」

「オラも」

「一人がいなくなつた途端、野次馬達が好き勝手始めたが、しかし。

「あ、あれ？」

「どうした？」

「こいつ、うんともすんとも言わないや。硬くてまるでダメだ」

「こっちもだ！」

ケビンが削るのに使つた墓石で削りつと試みた者もいたが、逆に墓石が折れてしまった。

「ええい、刃物屋を呼べ！ いつも『ヤポン刀』とかいう変なのが磨いてる変人だが、役には立つはずだ！」

結局、何をやっても傷一つつける事ができなかつたので野次馬はみな帰つてしまつた。

少しそ前。

「な、何だ！ 何の光……？」

少し休息をとつていたウェインもまた、隕石の軌道を目撃した。

「少し、気になりますね。それに、の方角は四年前の……！ 行けど、いつのですか？」

彼女は、ボンヤリとしていた予定が頭の中でスッと組み上がるのを感じた。

「まずは歩きましょう。なあに」「んな距離、馬車も魔機も要りません！」

次の日。

結局ムラマサと一緒に寝たケビンは、外の騒がしさに目を覚ました。

「おい、ムラマサ。起きるんだ」

「すう、すう……ふあ、お、おはよう」「あこまふ」

トロンとした目をしながらムラマサが起きる。

「外の様子がおかしい。礼拝なら昨日やつたよな？」

「は、はい。今日はケビンさんは私とお弁当と一緒に作ってお出かけに行きます……」

「おい、お前まだ寝ぼけてるだろ。起きり起きりー。」

類をべしペシと叩かれて、ムラマサはやっと目に光を宿らせた。

「ハツ！ 拙者は何を……？」

「本当、何だろ？」「ね」

「？」

「まあいいや。着替えたら外を見に行くぞ」

「は、はい！」

ケビンは着替えを済ませ、わたわたと礼拝堂の扉を開ける。

「初めまして、週間バルグのロティイだ」

「……は？」

「いつになく慌ただしい朝が始まった。

その頃。

「つ、疲れました。お腹すきました。……不落壁に、帰りたい

ウーラインは根をあげて倒れ伏していた。

「ブロン・ブロンが恋しい……」

彼女は、魔機を持ち出すなんて以つての外だと冗談として笑い飛ばしたマクギニスとの会話を思い出し、半日前の自分を殴り飛ばし

たくなつた。

マクギニス達も、まさか何の策も無かつたとは思つてもいい。  
「せめて馬車だけでも借りていくべきでした……。ああ、あんな所  
に親衛隊の セル・バン が見えるなんて、いよいよ私は死ぬので  
すか……」

もしも神がいるならば、助けてくれ。

薄らぐ意識の中、そう祈つて少しづつ前進するウェインを救う一  
つの影。

「おい、アンタ！ 大丈夫か！？」

「……セル・バン？ ああ、幻が話し掛けてくるなんて、私はとう  
とう氣が狂つてしまつたのですね」

「ま、幻い？ つたく、偵察の帰還中に変なもの見つけたな……」

彼女は、二回幸運に遭遇した。

一つは、セル・バンの操者が『魔機で市街に進入するのは、民衆  
を不安にさせる故に例外を除いて禁止とする』という基礎も覚えて  
いないバカヤローだつたこと。

もう一つは彼が、困つてる人を見逃せない『正義のバカヤロー』  
だつたことだ。

かくして、九時少し過ぎ。

市民の悲鳴をバックにウェインは無事に市街に到着した。

大変だつたのはウェインだけではない。

「すばり、どんな手品だ！」

「……はあ？」

ケビンは、礼拝堂を開けてすぐにロディの質問責めにあつた。

「あの隕石にどうやつて傷を付けたんだつて聞いてるんだよ」

「だから、こうガリガリーッとだな」

「あんたねえ、そんなんで市民が納得するかよ！？ 何かしたんだ  
ろ、言ってみろ…」

さつきからずっとこういう状態が続くいたちじつである。

曰く、隕石に傷を付けたのはケビンだけだ。

曰く、刃物屋が鉄塊すらも細切れにしたヤポン刀を使っても傷は一つもつかなかつたのに、ケビンが使つたのは墓石の破片だ。

曰く、なんか胡散臭い。

「あなたは、この隕石騒ぎで何かやらかす気だろ？！」

「知るか！　だいたい何だ、胡散臭いて！　全く関係ないじゃねえか！」

「あんた、四年前の時に恩師を市民に殺されたそудな」

「！」

「そん時にあんたが何かしらの感情を抱いても何もおかしくない。そしてその感情は昇華して……」

「おい」

「あん？」

「あまり、聞かれたくない」とつてあるよな

「……で？」

「誰にだつてあるはずだ。そして、しつこく返された時、怒つてぶん殴る奴もいるかもしれない」

ロディは、ケビンに下卑た視線を向ける。

「脅す氣かよ？　いいのか、俺の後ろにはカメラがいるんだぜ？」

魔石式の頑丈な奴だ、仮に壊そうとしても……」

「いいや殴るなんて滅相もない、俺はけつこう理性があるつもりだ。ただ、このまま好き勝手言われて、もしも俺のタガが外れたら怪我じゃあ済まないかもしれない。痛み分けでも済まないぜ」

「……けつ、つまりどうしようと？」

ケビンは頭を下げて率直に答えた。

「帰ってくれ。それと、俺と隕石は無関係だ。何で削れたかは本当にわからない。……信じてほしい」

ロディは、降参を示すジェスチャーをした。

「わかったよ。こっちだつて、あんたみたいなつまんない奴にいつまでも付き纏うのも面倒だ。引き上げてやる

「ありがとう。」「

ローティは嫌な顔をした後、ニヤリとやらじい笑いを浮かべる。

「俺はな、『一番乗りのローティ』って呼ばれてんだ」

「で？」「

「まあ聞けよ、俺以外にもいろんな記者の連中があんたのところに向かってつたぜ。逃げられるもんなら、逃げてみろよ」

「いいのか？」「

「他の連中に横取りされるのもアレだしな。第一、近隣の声と珍奇な隕石の写真さえあれば、後は『雑誌向けの編集』でなんどでもなる」

ケビンは苦笑した。

「それってヤラ、……」「

「おつと、他の連中がそろそろやつて来るぜえ？」

「ちつ。もう来るなよ…」「

「また何かあつたら行くぜ！ 最後に一つ、聞きたい。」「

「……なんだよ？」「

「お前ら、付き合つてんの？」

沈黙の後、ケビンと後ろでおどおどと聞いていたムラマサの顔が真っ赤になる。

「「……帰れ…」「

「ヒヤシヒヤヒヤヒヤヒヤ！ オウ、達者でな！」

言つや否や、ローティは風の様に消えてしまった。

「ケビンさん、どうします？」「

「ああ、地下の裏口から行くわ。なに、デートみたいなもんと思えぱいいわ」

「……そんなことばかり言つから、変な勘違いばかりされるので『ガル！』

「…………」の一人の頭に『お互い様』といつ嘗葉はないらしい。

街のどこか。

「つまり、見つかったのだな！？」

暗がりの中で二人の人影が相対する。

「ハツ、間違いなく リベンメタル でござりますー」

リベンメタル。

それが何かは我々にはまだわからないが、少なくとも報告を受けた女は非常に満足げな顔をした。

「よし、よくやった。早速ジン様をこの地にお呼びして……」

『その必要は無い』

「「！」

ジン・シラヌイ。

天へと続く道 の創始者であるその男は、造作もないといわんがばかりに空間を裂いてやってきた。

『時は、きたようだな』

市街北西部、親衛隊駐屯地。

「リコ！ 貴様は、国王陛下に召えられた 銀色 を何だと心得ているかあ…」

格納庫に、男性の怒号がこだまする。

「セル・バン ですか？ 強くてかつこよくて、市民の平和を護るために充分過ぎる程の傑作と、オレは感じました！」

リコと呼ばれた操者は誇らしげに答える。

「そういう問題ではない！ 貴様には一般常識を知つて貰おうとこの俺、ロジャーースが国境偵察隊にわざわざ頭を下げて編入させたのに……まさかここまで馬鹿とは！」

「あはは、ははは……」

「笑うな！ セル・バンの肩に付いた金の車輪は、お前がトップエリートである事の証明のはずなのに、通りすぎた子供が『リコの正義バカが帰ってきた』なんて言い出した時は俺はどうしたものかと

……

中年は、気が気でないといった感じに大きなため息をついた。

ウエインとリコは街中で魔機を歩かせたとしてロジャースに引っ捕らえられて今に至る。

「すみませんね。リコは才能はあるけど、どうにも馬鹿っぽくて、なんであいつが一年前の試験を通ったか、不思議でならない」

「いえ、久しぶりにセル・バンを見る事ができてよかったです。魔力伝達用のシリンドラが少し変わっていて、驚きました」

ウエインは背後に格納されたセル・バンに視線を注ぐ。

「やけに詳しいね。……いやまてよ、不落壁所属でその瞳と雪の様な銀色の髪、まさか貴女は！」

「ロジャースさん、どした？」

「馬鹿っ！ この人は我々木つ端の親衛隊が話し掛けるのも憚られた、あのオズワルド卿が……」

「だ、誰かと勘違いしていませんか？ 私は休暇を貰つただの一騎士に過ぎません！」

ロジャースの言葉をウエインが慌てて遮る。

「ふむ？ そうですか、わかりました。……今はそういう事にしておきましょう」

「あ、あはは……」

あくまで『勘違い』を貫くロジャースに、ウエインは苦笑いをした。

「おい、リコ！」

「な、なんでしょう！」

話しからのけ者にされていたリコは、ロジャースに呼ばれて慌てて振り返った。

「この人を案内してやれ！ 貴様はこの辺の地理に強いはずだ！ 練習用のブロンなら使用も許可する！」

「え！ さっきは魔機はダメだって言つたじゃありませんか！ それにあの魔機、装甲厚ぼつたいし、色はダサいし……」

「馬鹿野郎！ 例外だ、例外！ それに、いちいち小さな事でブーイングなんてやってて務まる正義かよ！」

「な、馬鹿にしないで下さい！ わかりましたよ、やりますよ！」

「……そういうことですので、心配は無用です。いやあ、あの頃の少女が、大きくなりましたなあ！」

「え、ええつ？」

ウヰンは自分の判断無しでどんどん進んでいく状況に唖然としながら、カナリアイエローのブロンにほつり込まれた。

バルグ王国は、王城を中心高級住宅街、住宅街と市場、スラム、工業地、内壁、農業地、不落壁、そして原野と国境からなる巨大な円形をしている。

ちなみに、ケビン達の礼拝堂はちゅうビスラムと住宅街の間にある。

「た、大変だあ―――っ！」

その中心たる王城で、絶叫が響き渡る。

「どうしたつ新入り！」

「姫さまが、第四王女のシレース様がどこにも居ない！」

「……なんだ、またか」

わけを聞いた途端にとてつもなくまらなそうな顔をした先輩に、新入りは首を傾げる。

「あのなあ、非常事態だぞ！」

そんな新入りに、先輩は突然全く関係なさそうな話題をふつた。

「お前は、モジヤヒゲという家畜を知ってるか？」

「えつ？ ……知ってるよ。一ヶ月に一度、雄雌問わずにきなり髭がブワツと伸びるんだろ」

「実はあれは、モジヤヒゲが新しい発見をした時の驚きが、一ヶ月周期でぶりかえすのが原因なんだとか」

「ああ、確かモジヤヒゲの髭は探求の象徴とかで試験のお守りにも……つて、それがなんだ！ 状況を考えろ！」

「姫さまのコレはな、モジヤヒゲの髭なんだ」

「……は？」

呆然と立ち尽くす新入り、無理はない。

「つまり、あの人はなにか自分の興味を引いたものに関しては、無類の力を發揮するのだ。ほら、机に『市場に面白い靴が入ったそうですね』って

新入りは、自分が国学を教える時の彼女の眠そうな顔を思い浮かべ、それから彼女が監視を振り切つてでも靴を探しにいく姿を想像し、その落差に戦慄した。

「どうか、『そうですね』って、他人ことなのね」

「そんな人だ」

「とにかく、探しに行くぞ」

「まあな」

「一人してため息をつく。

「何事かね？」

そこに、威厳を感じさせる大男が顔を見せた。

異界獣が遠因とは言え、一代で大陸間の全ての国家から大規模な争いを取り扱つた賢王、バルグ四世その人である。

「こ、国王様！」

新入りも先輩も地に伏して礼するが、先輩が新入りに小声で話し掛ける。

「髭つて言つたことばれてなきやいいが……」

「冗談じゃない！ ばれたら俺達みな殺しだ……」

「ところで」

「「は、はいっ！」」

二人して竦み上がる。

「娘の事を『モジヤヒゲの髭』と言つたのは、どちらかな？」

「も、もうおしまいだ……！」

「……仕方ない、正直に白状しよう」

震え上がる新入りの隣で、先輩が意を決して立ち上がる。

「私でございます！」

その目には人生全てを放り出したある種の潔さがあつた。

「面白い、実に！」

「「……へつ？」」

先輩と、続いて立ち上がった新入りは顔を見合させ啞然とした。  
「いやあ、確かにあいつは、紛れもなく知識欲の塊だ！　しかし、  
あのシレーヌが髭の代わりにモジヤヒゲから生えてくる図を想像し  
たら、フフフ、ハツハハハハハ！」

賢王は、とても自分の娘が変な比喩をされた親とは思えないぐら  
い大笑いして、先輩を見る。

「なかなか、面白い男だ。名前は！」

「はっ、セイム・ファイで『ゼ』います！」

「給料を上げるよう掛け合ってやるつー　では私はこれで。娘を頼  
むぞ！」

賢王はそういうて、自分の部屋がある塔への道を歩きだした。

「い、行っちゃつた」

「なあ」

「ん？」

「今まで姫さまの傍で仕えてきたが、あの人を見るとなんで姫さま  
が『姫さま』か、わかる気がする……」

「た、確かに……」

二人は、嵐の様に去つていった賢王をただただ見つめた。

その頃、住宅街を駆ける人影がいた。

工場勤めの女の子といった感じの服を着て自転車に乗つたその人  
影は、第四王女シレーヌ……もといモジヤヒゲの髭である。  
(フフフ、確かに私は靴を探しに行く予定でした。しかし、昨日ロ  
ディさんに聞いた限りではスラム付近に落ちた光は　隕石　だそう  
ですね。これは、興味を引かないわけがありません！)

眼を半開きにした実に眠そうな顔で不敵に笑つたモジヤヒゲの髭  
は、自転車を漕ぐ脚に力を入れた。

さて、騒動の中心たるケビンとムラマサは、何とか記者を撒いたものの、住宅街の広場まで来てしまった。

「さて、どうする?」

「お腹すいたでゴザル」

ムラマサとケビンの腹から音が鳴る。

「朝、食つてないしなあ……」

「でも、お金無いでゴザルよ?」

「そうだよなあ……」

ケビンは、参ったとばかりに頭をかいた。

「見つけましたよ……」

その後ろから迫りくる人影。

「バルグ・ウイークスです、ぜひ一言!」

「こっちが先だ、馬鹿! ……日刊『女性と健康』です。ケビンさん、隕石って何で落ちたのかご意見ありますか?」「司祭の墓に落ちたのは何故ですか?」

「何とか言えや!」

瞬く間に記者に道を塞がれる。

「あわわわわ……ケビンさん!」

人の波にムラマサが呑まれた。

「嫌あつ、助けて下さい!」

「ムラマサ!」

ケビンの脳裏に四年前の記憶、人に呑まれてぼろ雑巾同然になつた司祭の「きがらがフランシュバックする。

「貴様ら! 貴様らがあつ!」

ケビンはムラマサまで続く軌道上の記者を思いつきり殴り飛ばした。

「うわつ、今のはカメラ回したな! 暴力を振ってきたぞ!」

「報道の自由に盾突く愚民め! 今の行いを好き放題編集してやる!」

「うるせえ、ムラマサを返せ!」

通りが大混乱になつたその時。

「神聖なる王国で何をしているか、馬鹿者共め！」

広場一帯に響く声。

声の主は、親衛隊の紋章が腕に彫られたカナリアアイエローの魔機ブロン であった。

「とつととその人達を解放しろ！」

「ひいつ、職権乱用だ！」

「キサマらが言えた事か！ 正義の名の元に、引っ捕らえてやる！」  
相手が魔機、それも親衛隊では分が悪いか、記者達は蜘蛛の子を散らす様に引き上げていった。

「ムラママサ！」

「ケビンさん！」

ケビンはムラママサに飛びつき、強く抱きしめた。

「怪我は無いな！？ 無いよな、おい！」

「は、はい」

「よかつた、よかつた……」

「ケ、ケビンさん？」

ムラママサは、自らに体を委ね子供みたいに泣き出したケビンに狼狽したが、すぐに彼を抱き返した。

「あのー、感動の再会はいいけど。その、なんだ、あれだ。……よそでやれ！」

「「あつ」「

そしてすぐに魔機の操者に気づき、一人して本日一度目の赤面をした。

「はあ。とりあえず、飯でも食おうぜ？ ウチのお婆さんも腹減らせて待ってるしな」

「そ、そうだな！」

「ま、まずはご飯を食べまじょー！ 私もケビンさんも疲れましたから

「ムラママサ、拙者とゴザル」

「あつ！」

「つたぐ、ははは……」

「いやあ、ふふふ……」

「……なんなのアイシングら、腹立つんだけど、甘つたるい雰囲気の中で、魔機の操者、つまりロロは彼らを助けた事をものす」く後悔した。

食堂。

「いやあ、食つた食つた」

「お腹いっぱいでゴザル！」

「そいつはよかつた……じゃねえよ！ オレの財布を何だと思つてやがる！」

満足げに腹をさするケビン達と明らかに不服げなりロ。

「悪い悪い。何から何まですまないね」

「拙者、貴方みたいな優しい人はケビンさん以外見たことが無いのでゴザル」

悪びれもせずに言つケビン達に辟易しながら、リロはウエインに視線を移す。

「ウエインさん、このアホ共に何とか言つてやつてくれよ……ウエインやーん！」

「わ、私ですか？ つとど、うわあつ！」

ウエインは、自分に話題が回るとは思いもしなかったのか、驚いた拍子に長椅子から転がり落ちてしまった。

「おい、ウエインさん！」

「大丈夫か？」

ケビンがすぐさま手を差し延べる。

「！ ……はい、大丈夫です」

「怪我とかありません？」

「大丈夫ですから！」

ウエインは、彼の手を払いのけて立ち上がる。

「あ……！」、「めんなさい」

そして、ハツと我に返った様な表情になると、申し訳なさ気に俯いた。

「ウエインさん、アンタさつきからおかしいよ！ ポケッとしてたかと思つてたら、いきなり恐い顔してさ」

リコはケビンを睨みつける。

「思つに、アンタに会つてからなんだよ。知り合いかよ、アンタ」  
ケビンは、記憶の彼方からウエインを引きずりだそつとしたが、結局わからなかつた。

「いや、初対面だと思うけど。ただ……」

彼はウエインにグイッと近づく。

「その目。どつかで見たような？」

「……気のせいです」

「ふーん」

疑わしい目でウエインを凝視するケビンをムラマサが引きはがす。  
「ケビンさん、人にはあんまり言いたくない事なんてたくさんあるで」「ザル！ 拙者だつていろいろあるし……」

「わかつたよ、この話題はやめだ」

ケビンは疑わしげな顔を崩さぬまま引き下がる。

「で、アンタ達は何で追われていたのさ？」

リコの質問に、ケビンは先程を思い出したか少し嫌な顔をする。  
「あー、簡単に言うと、家に隕石が落ちたわけだ、そんで何か知つている」と話せつて。「冗談じゃないよ、俺が知りたいくらいなのにさ」

「ふうん。まあ、その隕石つてどんなだつたか詳しく……」

「詳しく教えていただけますか？」

リコの台詞は別の人物に遮られた。

白磁のような肌を際立たせる黒いシャツにカーキのツナギ、ボサボサの金髪頭にはちょこんとハンチングを被せた女の子。シーヌ、もといモジヤヒゲの髪である。

「 「 「 「 ..... どちら様ですか? 「 「 「

当然いきさつも彼女の立場も知る由の無い四人からすればわけがわからない。

「ああ、失礼。見ての通り、通りすがりの女工です」

幾度と無く脱走を繰り返してきた少女の変装は完璧で、確かに傍からみたら女工そのものである。

「工場に帰れ」

「あつ! いいじゃないですか、私だって気になるのです!」

しかし、さつきから野次馬に辟易していたケビンに冷たくあしらわれる。

「ケビンさん、今さら女の子の一人や二人、拙者は構わないでゴザル」

ムラマサに言われて、ケビンは仕方なさそうな顔で了承した。さつきの態度だつて、半分は極度の人見知りのムラマサへの配慮だ。

「わかつたわかつた、聞かせてやつからこつち座れ」

「まあ、ありがとうございます!」

少女は長椅子の端に腰掛ける。

「つまり、事の次第は昨日の夜に遡る」

ケビンは、昨日の出来事をかい摘まんで話した。

「 ..... というわけで、今俺は野次馬その他諸々に追われているわけだ。 ..... なんだ、その顔は」

話を聴き終わった三人は、やけに嫌そうな顔をしていた。

「いや、つまり、あなた方は昨日のお昼頃からずっと..... 「ホン、ちちくりあつっていたわけですね」

「アンタら、さすがにオレでも引くわ

「下々の私生活って、不潔なのね。うえつ.....」

「な、ちちくりあつとは何でゴザルか! 拙者達は今までこれらもとっても清い関係でゴザルっ!」

ムラマサは、ケビンにピタリと身を寄せながら反論した。

「 「 「 説得力、無いです」 「

三人揃つて否定する。

「 ……多少論点はズレたが、つまりこの隕石、君達はどう思つ?」

ケビンはズレた話題を無理矢理に軌道修正した。

「 そうだな、今のところ情報が少な過ぎて、オレには何ともわからん。親衛隊の資料にもらしい話は無かつたし」

「 私もサッパリです。すみません、力になれなくて」

「 そうね……それっぽい物を今思い出したわ」

リコとウェインが口を濁す中、少女が何かを掴んだようだ。

「 ただ、神話の中のお話だからあてにはならないけど……。」

「 構わない、教えてくれ」

「 ええ。貴方も司祭なら、六神神話は知っているでしょう?」

「 ああ」

「 六神の内、機械と金属の神 ヘイブメント のお話なんだけれどね 少女が、語る。

曰く、人々に金属を提供して、機械を捧げられて暮らしていたヘイブメントは、人々の更なる助けになろうと、新たに金属を創った。その名も、リベンメタル。

人々の明確で強い意志に反応して加工され、現存する全ての物質の上を行く硬さを誇り、人々の助けになつたりベンメタルだが、一人の男の強い意志で災いをもたらした。

その意志は 殺意 。

それ以外でも、怒り 、 悲しみ 、 恨み 、 嫉妬 といつた、マイナスの力で加工されたリベンメタルとその被害に悩ませたヘイブメント。

結局、彼は全てのリベンメタルを人々から取り上げて空高くへ放り上げてしまった……。

「 つてわけよ」

少女は語り終えた。

「なるほど、『強すぎる想いは人に害をなす』といつ戒めにもどりますね」

ウェインが応じる。

「私も、ケビンさん……でしたっけ？ 貴方の話を聞くまではそうだと思っていたのだけれどね」

「……仮に礼拝堂に落ちてきた隕石がリベンメタルだとしたら、俺の強い怒りで削れたというわけになるんだな？」

昨日を詳しく思い出すケビン。

確かに彼は『怒りに任せて』墓石をたたき付けた。  
「おいおい、神話の世界に迷い込んだのかよオレ達」

リコは、状況にただただ呆れ返るばかりであった。

「ただ、問題があるわ」

「……！ 神話通りなら、悪用される危険は高いで『ゴザルな』  
『』明察。特に 天へと続く道 、連中は何しでかすかわかんない  
のよ。最悪、この日を待っていたのかも知れないし」  
頭を悩ます少女にリコが提案する。

「だつたらさ、国王に直談判して止めればいいじゃないか」

「あなた、馬鹿でしょう？ 証拠もないのに、何て言うの？ 『連  
中は、神話の最強の金属を狙っているんですね…』とでも言つつもり  
？」

「だあつー。くそつ、どうせオレは馬鹿だよ、馬鹿の鏡です！」  
自分を全否定されていじけるリコの隣で、彼を馬鹿にした少女が  
閃いた。

「……いや、そうね。ようするにリベンメタルを王宮に運んじゃえ  
ばいいのよー」

「なるほど、王宮にはさすがに 天へと続く道 も手が出せません  
ね」

ウェインは少女の言いたいことを悟った。

「だが、どうするでゴザルか？ 王宮まで運んでも、この面子では

突っぱねられて終わりで「ゴザル」

司祭、司祭の見習い、騎士に女工。

確かに説得力がない。

「それなら、オレは下つ端とは言え国王親衛隊だぜ！」

「下つ端なら余計に無理でゴザル」

「なんでだよ！」

「例えば、『金を握らされて懐柔された』、『家族を人質に取られた』、『洗脳された』など、中途半端に情報を知つていて、立場がある者ほど利用される、あるいはそれを疑われるものでゴザル」「ちえつ。にしてもアンタ、詳しいな……」

「リ」「は、自分の力不足を痛感してうなだれた。

「どうしたものでしようか……」

「去年の第一王子結婚式の時にもつと王様に媚びるべきだったかな？」

ウエインもケビンも打開策が浮かばない。

「はあ、仕方ないわね……」

少女がため息をつく。

「こうなつたら奥の手よ！ これを見なさい！」

彼女がツナギから取り出したそれは、王族関係者を表す印が刻まれたペンダントであった。

「へえ……」

「あら……」

「なるほど、でゴザル」

「こいつは……」

それを凝視する四人。

「フフン、どうよ……」

誇らしげな少女。

「よく出来た偽物だなあ」

「いや、盗品かもしません」

「あの子、ああ見えて王族を殺して奪うなんて残酷な事をしたかも

## 知れぬで「ゴザル」

「なんにせよ、大したヤツだ！」

四人は好き勝手言いはじめた。

「違う！ 膾作でもなければ盗品でもない！ 私はシレーヌ、この国の第四王女なのよつ！」

「どこの国にツナギ着て髪の毛ボサつかせた王女がいるんだよ」「嘘ならもつとマシな嘘をつきなさい？」

「いや、本氣で信じてる可哀相な子かも知れぬで「ゴザル」「なんにせよ、大したヤツだ！」

四人の視線が冷たい。

「もう、何なのよ！ 人がせつかく力になるつて言つてるのに！」

「悪かつたよ、すまんすまん」

「ごめんなさい、貴女何だか弄りがいがあつて……」

「悪氣は、ある方で「ゴザルよ？」

「はははは」

四人それぞれ、謝つてゐるのか違うのかわかりがたい詫びを入れた。

「もう知らない！ 私帰る！」

少女は不機嫌そうに頬を膨らませた。

「それはちょうどいい」

「城に帰つてもりますよ、シレーヌ様」

突然後ろから声がかかり、全員が身構え、少女が絶望の混じつた素つ頓狂な声をあげる。

「げっ！ シンとセイム！」

「まったく、人騒がせなんだから」

「リベンメタルだか何だか知らないけれど、他人に迷惑かけてばかりはいけません。さあ、物理、数学、国学、歴史の宿題は終わりましたか？」

シンとセイムと呼ばれた男達は一人がかりで、抵抗する少女を抱え上げる。

「嫌！ 私は真実を知りたいの！ せつかくロティさんに教えても

らつたのにい！」

「問答無用！ 行きますよ！」

「いやあ、皆さん。ウチの『モジヤヒゲの髪』がお世話になりました。ではではー」

少女はスーツ姿の男性一人に引きずられていつてしまつた。

「な、なんだつたんだ？」

「さあ、私にはなんとも……」

ケビンとウェインは顔を合わせて首を傾げる。

「しかし、やつぱり君どこかで……」

「気のせいですってばー！」

「ケビンさん！」

「アンタなあ！」

さつきの話を蒸し返そとしたケビンは、二人に凄まれす「」  
引き下がつたが、再び口を開いた。

「しかし、これからどうする？ 一応俺はママサと帰つて様子を見るつもりだが」

「私はひとまず持ち場に戻ることにします。 天へと続く道 が怪しい以上、守りは固めておかなければ」

ウェインは不落壁の方角を見つめながら答えた。

「……いいのかよ、アンタ。せつかくの休暇なんだろ？」「構いません。お土産も買いましたから、ほら」

「ほら、じゃないよ！ 十五歳に何て卑猥なもん見せてんだ！」

カバンに詰まつた 卑猥なもん から顔を赤めて離れるリ口。

「まあ、そんなこんだからオレはこの人を送るよ。何か縁があつたら、また会おうぜー！」

「ああ、またな」

「今日の事は本当に感謝してるでゴザル。実は拙者、極度の人見知りで……」

「いいって、気にすんな。正義の味方には当然の行いやー…… さすがに目の前でちちくりあわれるのは勘弁な」

「「あはは……」」  
広場での出来事を思い出し、ケビンとムラマサは乾いた笑いをした。

「じゃあな、アンタ、らー。」

「さようなら」

「ああ、さよなら」

「縁があつたら、でゴザルな！」

そして彼らは、一同に会した広場で別れを告げ、それぞれの目的地に向かう。

「さすがに記者どもはいないよな……」

ケビンは、視線を泳がせながらムラマサとの距離を詰めた。

「ハハハ、ケビンさんは神経質でゴザルな。」

「お前が心配だからな、次はちゃんとお前を守りさせてくれよ

「ケビンさん……！」

また二人して往来には毒な甘つたるい空気を振りまいていたが、ムラマサは彼方に王城へ向かう一つの人影を見ると、目の色を変えて飛び出した。

「ムラマサ！？」

「失礼、すぐに戻るのでゴザル！」

「おいつムラマサ！ くそっ！ なんて速さだ、本当にムラマサかよ、あいつ……」

ケビンも慌てて追いかけるが、彼女との距離は縮むどころかますます遠ざかる。

「ムラマサ、おい、ムラマサあつ！」

「見つけた、見つけたぞ！ 不知火・刃！」

親衛隊北西駐屯地。

帰還用に手配されたりコのセル・バンの前で、ウエインがロジジャースに別れの挨拶をしていた。

「では、お帰りになるのですね？」

「はい、何から今までお世話になり、ありがとうございました」「いやいや、構いませんよ！ とにかく、オズワルド卿はお元気ですか？」

オズワルド。

その名前が出た途端、ウェインの顔が曇る。

「……何か、あつたのですね？」

「我が師は、オズワルド卿は……四年前に手紙を残して、行方をくらましてしまいました」

「それは、嫌な事を聞いてしました。失礼」

「いえ、大丈夫です。……そろそろ、行かなくては。リコが待っています」

「それでは、お元氣で」

「はい！」

ウェインは一礼すると、リコのセル・バンに乗り込んだ。

「……大きくなつたものだ。俺が会つた時はまだ十歳ですら無かつたなあ」

ロジャースは、徐々に遠ざかるセル・バンを見送りながら感慨深げにため息をついた。

「なあ、ウェインさん」

「なんですか、リコ」

狭い操者槽の中で、リコが立ち乗りしているウェインを見上げた。

「さつき話してた、オズワルドってどんな人だ？」

「そうですね……。強く、誠実で、霸気に溢れた人でした。私はいつも師にじごかれて、おかげで親衛隊の一員になれた、はずなのに

……

「わ、泣くなよ、ウェインさん！」

急に涙を流したウェインと、それに慌てるリコ。

「いろいろ詰ありなら、これ以上はいいよ」

「いえ、大丈夫です。……ゴルダーを知っていますか、リコ」

「誰も乗れない最強の魔機、だろ？ 魔機乗りで知らないヤツはないよ」

「オズワルド卿は、あれの操者をつとめていました」

「！ ……化け物かよ、その人は」

「ゴルドー。」

稻妻と嵐を纏い、戦場を駆け抜けたと言われるその黄金色の魔機は、並の操者が乗ればたちまち命を奪う、常識外の存在であった。「師は、ゴルドーと共に常勝不敗を貫きましたが、たった一つの存在に最後まで勝てませんでした」

「……？」

「時間、です。」

「なるほど、老化か……」

「はい。いかに師が強かろうと寄る年波には勝てず、ゴルドーに連続して乗れる時間も一日から十一時間、そして三時間、一時間、十五分……私が弟子入りした時には既に五分乗れれば御の字、というくらいまでに衰弱なさっていました」

ウーハインは、己の体に鞭を打つて毎日彼女を鍛え上げたオズワルド卿のシワの深い顔と大きな背中を思い出しつつ、そんな彼を裏切るようにな落壁に逃げ込んだ自分に激しい嫌悪感を感じた。

「じゃあ、オズワルドって人がいない今はゴルドーはどこにあるんだ？」

「王城の地下のどこかに他の魔機と共に安置されていると聞きました」

「そうか。……おっ、見えてきたぜ、不落壁の門」

眼前に広がる広大な壁。

そこに入るための門が、少しづつ彼らの視界を埋めていく。

「……感謝していますよ、リロ」

「くへつ、毎度あり」

その頃ロジャースは、格納庫の ブロン の整備パネルに魔石を

差し込み、ブロンから不自然に厚ぼったい装甲を次々と剥ぎ取つていた。

「 ゴ尔ドー。お前の主は行方をくらませたそうだ」

彼の眼前には、カナリアアイエローの装甲をバージし終え黄金に輝く魔機がそびえ立つていた。

「私は、心が無いお前が羨ましい。……もう疲れたよ。いつまである人を待てばよいのだ？」

ロジヤースは、手に持つた集合写真、その中央の長髪の男性を見つめて深いため息をつく。

「たつた今だ、ロジヤース！」

「！？」

ロジヤースは、若い男の声に慌てて振り返る。

「貴様、何者か！」

「信じるか信じないかは貴様の自由だが、……オズワルドだ！」

写真に写つっていた長髪の男性の面影を残した青年は、ロジヤースの延髄に鞘をたたき付けた。

「かつ……」

「すまないな、ロジヤース。しばらく眠つていてくれたまえ」

オズワルドを名乗つた青年は整備パネルを使ってリミッターを外して、ゴ尔ドーに近づく。

ゴ尔ドーもまた、青年が近づけば近づく程その輝きが増していく。「ヒヤハハハ……さすがだ、ゴ尔ドー！ お前はこうでなくっちゃあ！ では始めよう、新たな世界への第一歩を！」

青年のその目は、ロジヤースの持つていた集合写真に写つていたオズワルドと同様に常に戦いを追い求める人間の、極めて暴力的な光が宿つていた。

## 復讐の始まり（3）

オズワルドを名乗り黄金魔機、「ゴルドー」を強奪した青年は、遙か昔から使つてきただ物に対するような無意識的な挙動でその起動を完了させた。

「……各部以上無し。フム、さすがだロジャース」

青年は惚れ惚れした様に静かに喜んだ。

リミッターを付けたとは言え、オズワルド以外がゴルドーを動かすには高い集中力と魔力を必要とする。

そんなゴルドーに定期的に慣熟運動をさせた跡が確認できるのは、ロジャースがオズワルドを真摯に待ち続けた証拠であり、彼が日頃の鍛練を欠かさなかつた事を意味する。

「これからも、よき騎士でいろよ、ロジャース」

「ふふふ、ありがたきお言葉でござります」

「つ！」

背後からかかつた声と駆動音に振り返つた先には、頭部についた金細工のシャークマウスが目を引く銀色の魔機、「セル・バン」が立つていた。

「ロジャース」

ゴルドーが、背後のセル・バンに剣を向ける。

「何の用だ。止めるつもりならば……」

「もしも、仮にもしもあるオズワルド卿であるならば……いや、リミッター無しでゴルドーを動かしたのです。閣下でないはずがありません！ 私めに、これから貴方様の行いを手伝い、見届ける機会をいただきたく存じます！」

「……行くも下がるも、地獄だが？」

「十五年前、閣下に命を救われてからこの命、国王ではなく閣下の為にあります。私は、閣下の為ならばそれを捨てる」ともことわぬ覚悟にござります！」

「……フツ、お前はそういう奴だつたな」

青年、いやオズワルドは、微笑すると、ゴ尔ドーで手招きして自らの方に来るようジェスチャーした。

「ついて来い！ 目標は不落壁、北部ブロックの一一番から十一番ゲート。遅れるな！」

「ハッ！ 閣下の、仰せのままに！」

黄金色と白銀色の魔機が、まるで一いつで一つであるかのように動きを崩さずに夕方の街を駆け抜ける。

それは、互いに心から敬服し、そして信頼しているからこそ為せる動きであった。

不落壁、西部ブロック。

リコのセル・バンは、無事に滑走路に着地した。

そして、それを監視すべく多くの騎士が数人用の見張りやぐらに集まつた。

「なんだ！？」

「親衛隊？」

「いつたい、何の用があるんだ！？」

事情を知らない不落壁側からすれば、日頃仲の悪い親衛隊の銀色が来たという事実に身構えるのは無理もない。

「どうします、ウヰンさん」

「私が出ます。君では色々ややこしくなるかもしれません」

「さいで」

不安げに見上げるリコを制止し、ウヰンが魔機のハッチを開ける。

「皆さん、ただ今帰りました！」

「「「ウヰンちゃん！？」」

「なんで、ウヰンちゃんが親衛隊の銀色から！？」

「さては、何か悪い事をされたかも……」

「洗脳だつて！？」

「何い！？ オラア、銀色の操者、出で！」

待ち人が因縁深い親衛隊の魔機からひょつゝり顔を出すといつ急な出来事に、やぐらに集まつた連中がさらにやかましくなる。

押し出されて落つこちた本来のやぐら番が、その様子を見て慌てて叫ぶ。

「わあ、あんまり集まるな！ こいつは結構、年代物で……うわっ、

ひびが入つた！」

「なにつ、崩れるぞ！」

「逃げろおおお！」

ガラガラと音を立てて崩れるやぐらから、騎士達の絶叫や怒号が響く。

「……すみません、どの道ややこしいみたいです」

「さいで」

自分に振り返つて頭を下げるウエインに、リコはため息をついた。  
「おや？ ……ハハハハハ！ 皆、どつもウチのブロックに親衛隊の方が何故かやって来て、しかも休暇を満喫しているはずのウエインも乗つていたらしい」

ちょうど各ブロックの隊長との連絡会だつたマクギニス隊長は、外で起きた風景を眺めて、楽しそうに他三人に語りかけた。

「ハハハ！ そりやあ、面白い。ひょつとしたら、あんたに『娘さんを下さい！』なんて行つてきたりしてな！」

「『済まないが、娘は私の物だ、実は性的にも』ってな、ガハハハ

！」

東部ブロックのニックス隊長の冗談に南部のヤシ隊長も応じる。

「……お前ら、騎士ウェインはマクギニスの娘じゃない。それに連絡会で猥談はやめろと、何度も言つたら覚えるか！」

「いやあ、すまんすまん」

苦言を呈した北部のオーカス隊長に仲良く応じる隊長一人。

「まったく……。ん、マクギニスよ、こちらにも一機突っ込んでくるぞ。う、うわあつ！ この識別はオズワルドの、『ゴルド

北部隊長の突然の断末魔は、爆音で搔き消えて聞こえなくなった。

マクギニスは、素早く魔石式通信機の発信先を外部に切り替えた。

「……敵襲！ 待機中の騎士は、速やかに ブロン・ブロン で備えろ！ 私も ブロン・ドウ で出る…」

事態は不明だが、やることは一つ。

不落壁を襲つた愚か者を完膚なきまでに叩くことだ。

その頃。

ケビンはムラマサを追つていぐ内に、とある場所にたどり着いた。

「……城、だよな。なんだ、この状況？」

そこは、バルグ国を中心とする王城。

しかし、守りを固めるべき番兵も、王族や大臣につきつきりの使人も、等しく全員が首、左胸、頭などの急所から血を流して倒れていた。

「ムラマサ……じゃないな。あいつは人混みの次に血しぶきが苦手だし、第一、死んでから少し時間が経っている」

ケビンは、できるだけ彼らを見ないように前進する。血を見るのが苦手なのは、彼も同じである。

「ダメだな、気分悪くなってきた」

急な事態に頭が混乱していたからか、彼は重大な事実の理解に少し時間を必要とした。

「……ムラマサと、あとあの姫さん、確かシーラース！ あいつらが危ない！」

走り出したケビンだが、部屋を抜け、広場を抜けを繰り返す中でお広がる大量の死体に自分を重ね、身震いして立ち止まつた。

（俺もこうならない保証なんて無いんだ……）

ケビンは、彼の心のどこかで勇氣を司つている部分が、しゅるしゅると萎えていくのを実感した。

「……おい、あんた」

「！」

そんなケビンの視界の隅で何かが動き、彼に声をかけた。

「あんたは、姫さんをさらつてつた人！」

「ああ、いかにも俺がそつだ。なんであんたはここに、ゲホッ……ここにいるんだ？」

ケビンの記憶の限りではセイムと呼ばれていたその男の体は、腰を境目に綺麗に割断されていた。

「詳しくは、長くなる。そつちは誰にやられた！？」

「わからない、ただ複数人はいたはずで、俺達をやつたのは、一人の男だ。姫さまを連れて城に戻つたら、城門の方から叫び声がして、ケホ、ケホ……姫さまを新入りに任せて様子を見に行つたら、ケホツ！……このざまだ」

言葉を紡ぐたびに口から出る出血、恐らく長くはない。

「姫さんは、どこにやつた！」

「おそらく、地下のシェルターだが、俺達をやつた連中も、コホ、コホ、そつちに行つた。あと、あんたの連れさんも向かつたぜ」

セイムは言い終わると一際大きな咳をした。

目の焦点があつていない。

「わかつた。クソ、力になれなくてすまない」

「いいんだ、あんたが立ち止まつたのも、きっと天の配剤。ケホッ、ケホケホ……姫さまを、頼む。彼女は、知りたがりだが、こんな事は知つちゃいけない、見ちゃ、いけない。……畜生、給料あがつたのに、田舎の母さん、楽にさせて、隣に、引っ越しして來た、かわいい子を、ナンパして、そしたら……」

「おい？……くそつ、くそつ！」

セイムは、生涯で成し遂げたかつた事、人としてごく平凡でささやかな望みすら最後まで言い切れずに事切れた。

「地下のショルターだな。任せろ、彼女には俺と六神の加護がついてるぜ。何たつて司祭だからな。……あばよ、来世は幸せにな」

ケビンはセイムに手を合わせ頭を下げるが、脇目も振らずに走り出した。

「ムラマサ、姫さん、俺が来る前に死ぬんじゃないぞ！」「不落壁、北部ブロック。

「コホ、コホ……！？ 誰か、誰か生存者は…」

瓦礫の頂点、隊長室にあたる箇所からオーカス隊長が顔を出す。「隊長！」

「おおっ、ロツツか！」

オーカスに走り寄る三機の魔機。

純白の体に紺の右腕、北部監視隊カラーのブロン・ブロンである。「ロツツ、被害報告！」

「ハツ、各ゲートは崩落、通行は不可能と思われます。自分とギャラクとメイスン以外は、瓦礫に巻き込まれて全滅したかと……」「くそっ、そうか……。私のブロン・ドウは…」

「ギャラクが持つてきています！」

ギャラクのブロン・ブロンの巨大な紺色の右腕は、ブロン・ドウを軽々と吊るし上げていた。

「でかした！ 地獄に六神 といふことわざは、いふう時に使うのか！」

オーカスは、自身の長年の相棒にワイヤーを使って登頂し、操者槽に乗り込んだ。

「ロツツ。私には外敵が、あの 黄金魔機 に見えたが」

「間違いありません。十時の方向にセル・バン一機を連れて浮遊しています」

「……なるほど。こちらを観察している様にも見えるな。ナメおつてからに！」

北部監視隊、総勢九十七の魔機が全滅、残存戦力は四機。  
おまけに襲撃をかけて来たのは伝説の 黄金魔機 。

悪い冗談にしか思えない状況であり、そんな冗談の類いが大嫌いなオーカスは悪態をつきながらブロン・ドウを起動させる。

同時に、ゴ尔ドーが魔力回線をオープンにした。

「かかるつてこい！」

「……なに？」

「ゴルドーに乗っている若い操者の、そのシンプルな挑発に耳を疑う。

「せつかく待つてやつたのに、わからん奴だな。かかつてこいと言つたのだ、オーカス！」

「フン。オーカス！　だと？　どんな手品で、ゴルドーに乗つているかは知らないが、オズワルドはともかく貴様のような若造に呼び捨てされる覚えはない！」

オーカスは、口から血の泡を飛ばしながらゴルドーを睨みつける。「物分かりの悪いのは昔から変わらないな、オーカス。……もしかして、こいつが怖いのか？　何なら、かわいい部下を引き連れての四機がかりでもいいんだぜ？」

「貴様あ！」

「隊長！」

魔力を脚の辺りに集中させたオーカスのブロン・ドゥをロツツのブロン・ブロンが抑える。

「離せ、私がこんな若造に！　いよいよにされて！」

「ここは我々に任せて、隊長は早く王城に連絡を！」

「しかし、ロツツ！」

「ブロン・ブロンよりもブロン・ドゥの方が速度は上です！　我々も五秒は稼ぎます！」

「貴様ら……」

オーカスは、感極まって涙ぐんだ。

「……ああ、オーカス。非常に申し訳無いが貴様らに逃げ場など、ない。見たまえ、バルグ王城の姿を！」

魔力を球体状の頭部に集中させたオーカス他三名は、その状況に驚愕した。

「隊長！」

「い、これは……城が、城が闇に覆われている！」

王城は夕焼けの中でも見て取れる程にどす黒い闇で包まれ、闇も

少しづつ拡大を続けていた。

城だけではない、街の至る所に闇は現れ、中から漆黒の魔機が踊り出る。

「正解だ！ 御褒美にプレゼントをくれてやるつー。」

「ゴルドーは、どこからともなくブロン・ブロンの右腕をブロン・ドウに放り投げた。

「た、隊長！ メイスンとギャラクが！」

ロツツの叫びに反応してオーカスが振り返ると、メイスンとギャラクのブロン・ブロンの白い細身に幾筋もの軌道が通っていた。ギャラクのブロン・ブロンに至っては、特徴である不格好に巨大な右腕すら見当たらない。

「なつ！ ……まさか、本当にオズワルドとでも言つ氣か！」

「そうでなければ、ここにはいない！」

全身を輝かせたゴルドーが、手の平に微細な穴が空いた左腕を振り上げる。

それと同時にブロン・ブロンを包む軌道は切り口となり、なぞるように機体から手足が削げ落ちていく。

「メイスン！ ギャラク！」

推進力を失ったブロン・ブロン一機の操者槽は、不落壁上空から地表へ真っ逆さまに落ちていき、落着して粉々になった。

「私を前に逃げの一手を打つた罰だ、オーカス！ かかつてこい、フルパワーを出したゴルドーの慣らし運転はまだ終わっていない！」

「慣らし運転……慣らし運転だとお！？ よくも、オズワルドめ！」

オーカスは、怒りに任せて魔力をブロン・ドウに注ぎ込んだ。

ブロン・ドウを先程のゴルドーのように光が覆う。

「ほう？ ロジャース、見る。オーカスは銀色でもない魔機で 魔力解放 をするつもりだ！」

「この力、風でござりますね」

ブロン・ドウを中心に、暴風と言つても差し支えない風が瓦礫や木々、部下の亡きがらが入った魔機の残骸を巻き上げて辺りを覆う。

しかしブロン・ドウは、オーカスが風を強めれば強める程に機体にひびをいれていく。

オーカスもまた、己の体中からおびただしい血が流れて行くのを肌で感じた。

「ハア……やめておけ、オーカス。魔力解放にそんな様子では一分持たん」

言われるまでも無く、オーカスは知っている。

自分とオズワルドの撤回できない力量差を。

ブロン・ドウで、ゴ尔ドーに勝てる道理など、かけらもない事を。

第一、魔力解放に耐えるには自身も魔機も年を経すぎた事を。

「ならば、ならばせめて一分！ 貴様を目一杯不愉快にさせてやる！」

「フツ、ヒヤハハハハハ！ できるならばさせてくれよ、オオオ力アス！」

「今の内にロツツは離れろ！ 銀色がいる西部に連絡を！」

オーカスは、自分の全てをブロン・ドウの両の豪腕に託した。

その頃のケビンは、地下へ続く階段に向けてひたすら足を進めていた。

所在が掴めないムラマサよりも、まずは行き先が明確なシレーヌを追うことにしてしまったのだ。

階段にたどり着いたケビンは倒れ伏したもう一人の付き人、シンと呼ばれた方を発見した。

「おい、大丈夫か！？」

「あ、あなたは……！」

幸い、意識はあるようだ。

「話はセイムつて奴から聞いた！ 姫さんは？」

「シレーヌ様は、こちらの隠し扉に向かわせました。私は……私は、もう駄目です」

シンはそう言って苦笑した。

「駄目って、言っちゃあ何だがあんた、傷一つ無いぜ？」

「いいや、駄目です！ さつき見知らぬ少女に触られた場所が、どんどん私の頭を不安と不快感で埋めて行くのです！ う、うあ、あああ……」

シンは自身の右肩を押さえて、不快感でいっぱいと言わんばかりの表情を作った。

「隠し扉の開け方は！」

「そこの本棚の赤い本を、強く押し込んで下さい……」

「こうか！ うわっ、ホントだ！」

ケビンが言われた通りの行動をすると、本棚がかかつた壁が音を立てずについた。

「私の代わりに、頼みます！」

「わかった。あんたに六神の加護のあらんことを、じゃあな！」

シンに手を合わせた後、ケビンは壁の向こうへ全力で走った。走つて、走つて、そして。

「姫さん！」

「……ケビン、さん？」

ついに、タルの中でガタガタ震えていたシーラースを見つけた。

「そうだ、ケビンだ！ シンって人に教えてもらった！」

「シンは、シン・ウイルは無事でしたか……？」

「そ、それが」

言いかけて、ケビンは口をつぐんだ。

セイムの気持ちを無駄にしたくなかったからだ。

しかし、その空白はシンの身に何かがあつたことを少女に理解させるには充分だった。

「シン、シン！」

「あっ、姫さん！？ ……くそっ、俺は駄目な奴だな！」

たまらず走り出したシーラースをケビンは逃がしてなるものかと夢中で追いかけた。

再び不落壁、北部。

両脚を失い、自身の風でなんとか浮いているであろうブロン・ドウが、未だ無傷のゴルドーに相対していた。

「オズワルド、化け物め……」

「いやあ、大したものだ！ 五分持つとは想定外」

「貴様の想像とやらに、振り回されてなるものかよ！」

オーカスは魔力を維持すべく全身に踏ん張りをめる。目からの流血で視界の確保も困難な彼だが、足元で自身の血が波をたてているのは感じる事ができた。

「う、くうつ……」

意識が遠のく、口の中で血が固まる。

「せめて、一太刀！」

遠のいた意識を自身の脚にナイフを突き刺して無理矢理取り戻した彼は、魔石にひびを入れる勢いで魔力を流し込む。

「風よ、我に力を！ 我に仇なす敵を討て！」

風の鎧は強度を高めるべく彼の方へと凝縮していき、同時にブロン・ドウの魔力伝達パイプや肩部サブセンサ等の打たれ弱い部位が音を立てて吹き飛んでいく。

「何故貴様が若返り、我々に敵対したかななどは、最早どうでもいい。死ね、オオオズワルドッ！」

操者槽と両腕を残したブロン・ドウが、全身の輝きに身を焦がしながらゴルドーに突撃をかける。

「ああ、オーカス、貴様を軽視した私を許してくれ……やはり貴様は大した奴だ」

「今更詫びたとて、遅い！」

「だからこそだ、オーカス。敬意を表して一撃で殺す！」  
ゴルドーの左腕を風が包む。

「竜巻！」

その右腕を振り上げた瞬間、ブロン・ドウの真下に巨大な風の竜が現れ、機体が纏つた風の鎧ごと飲み込んだ。

「！」、これはっ！？」

「さよならだ、オークス。来世に六神の加護あれと言つべきとこり  
だが、私が直々に輪廻の輪から消し去つてやる」

ゴルドーは、先程ブロン・ブロンを葬る際に使用した右腕に雷を  
纏わせ、振り上げる。

「紫電！」

オズワルドの声に応ずるが如く上空から現れた雷の竜は、風の竜  
を食い破つた。

「フフフ……ヒヤハハハハハツ、アーツハハハハハ！ ロジャース  
！ ゴルドーを使いやすくしてくれてありがとう！」

「閣下の喜びは、私の喜びであります故に」

「確かオーカスは、西に銀色がいると言つたな」

「はつ、私以外にリミッター付きでゴルドーを動かした稀有な奴で  
ござります」

嬉しそうに報告するロジャースに、オズワルドの顔が綻ぶ。

「惚れ込んでいるな、ロジャース」

「自慢の部下、だつた奴でございまして」

「そつか……よし、次は東だ！ メインディッシュは最後に戴く！」

一機の魔機が東部に向けて猛進する。

後には不落壁だった何かと、大量のブロン・ブロンの残骸。

しかし、そこにブロン・ドウの痕跡は一片たりとも存在しなかつ  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7094z/>

---

リベンジ！

2011年12月28日20時56分発行